生態園観察マップ　＊＊行ってみよう見つけてみよう＊＊　冬編

＜＞はおもな地点をあらわしています

季節のできごと　・水田の稲、『彩のきずな』が稲刈り→乾燥（はざ掛け）→脱穀の手順をへて、玄米の状態となりました。このあと、精米すると、白米として食べることができます。

・カルガモの親子が田んぼを横切ってバッファーゾーンへ行ったり、下の池のアシの影に並んでいる姿がみられます。＜A・B・C＞

はざ掛け

＊ヤツデ

＊クチナシの実

カルガモ

＊印は、裏に説明があります。
読んで参考にしてみて下さい。

赤い実

ピラカンサ

冬は赤く熟す実が多いです。生態園ではお正月飾りに使われるヤブコウジ（ジュウリョウ）のほか、ノイバラ、ピラカンサ、モチノキ、アオキなどが見られます。冬の赤い実は視覚の鋭い鳥に見つけて、食べてもらうためといわれています。あまり香りがしないのは鳥の嗅覚が鈍いから、小粒で丸い形は鳥が食べやすいようにです。

鳥に食べられたあと、種はフンと共に排泄され、そこで芽を出します。フンは種の生長のための肥料にもなります。実によっては、あまりおいしくないものや少量の有害成分を含んだものがあります。これにより、鳥に少しずつ食べてもらい、長期的にいろいろなところまで運ばれるようになっています。

鳥と植物のように、異なる種別がお互いに利益を得る関係を結ぶことを相利共生といいます。

赤い実が大好きな鳥は、ヒヨドリ、ムクドリ、オナガ、ツグミなどです。

ヒヨドリ

クチナシの実

おせち料理に欠かせない栗きんとんや、たくわんをきれいな黄色に仕上げるための染料として使われるのが、クチナシの実です。 クチナシは、６月から７月頃に濃厚な香りを放つ白い花をつけ、その後、少し変わった形の実をつけます。実は１１月頃から１２月にオレンジ色に熟しますが、裂けません。そこから、「口が裂けない」という意味で、クチナシという名が付けられました。

「口出し無用」という意味で、碁盤の脚にこの形が使われているそうです。

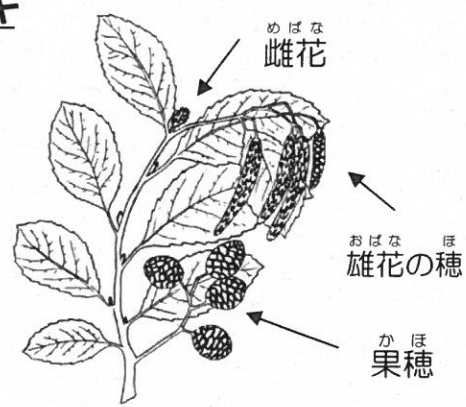
ヤツデ

日陰に、20ｃｍ以上もある大きな葉をつけ、11月～12月頃に白く毬状の花を咲かせているのはヤツデです。葉の形は、名の通り“てのひら”のようですが、７つまたは9つの奇数に裂けており、8つに裂けることは稀です。その形から「天狗の団扇」という別名があります。

生態園マップ

＊＊　2019冬編　＊＊

ハンノキ



生態園には、ハンノキがたくさん植えられています。これは、埼玉県の蝶であるミドリシジミをよぶためです。ミドリシジミの幼虫は、ハンノキの葉を食べて成長します。ハンノキは、水気の多い場所を好み、田んぼの収穫後の稲を干すはさ掛け用の梁として使われ、古くはハリノキと呼ばれていました。

ハンノキは、12月～2月の寒い時期に花を咲かせます。一本の木に形の異なる雌花と雄花がつきます。秋に小さな松ぼっくりのような実（果穂）をつけます。この実は濡れると閉じ、乾くと開いて種を隙間から散らします。

最近は水田や沼地が減るとともにハンノキも減り、ミドリシジミの数も少なくなってきました。

ミドリシジミはゼフィルスと愛称づけられた蝶のグループに含まれています。ゼフィルスというのはギリシャ語の西風の神に由来します。梅雨の頃、年に1度だけみられる美しい蝶として愛されています。